

# FD ニュース

*NDA Faculty Development News*

No. 7 (2010.7)

## 主な内容

1. 巻頭言  
心の絆  
防衛大学校長 五百旗頭 眞 2
2. 平成 21 年度教育奨励賞  
高等教育開発官 安岡 宏 4  
  
— 受賞者から —  
再確認！フィードバックの重要性  
戦略教育室 准教授 井上 偉彦 5  
  
授業を省みて思うこと  
通信工学科 准教授 田中 哲 7
3. FDの動向と今後の方向性  
大学教育研究フォーラムに参加して  
人間文化学科 准教授 井上 泰至 9
4. 米海軍士官学校留学を終えて  
アメリカでの授業  
本科学生 4 学年 夏谷 智之 10
5. 防衛大学校におけるFD活動  
高等教育開発官 安岡 宏 12

# 1. 巻頭言

## 心の絆

防衛大学校長 五百旗頭 眞

教師の任務は、知のプロフェッショナルとして、学生に対し担当分野についての知識を与えることにある。良質の知のプロフェッショナルであるために教師はよき研究者、よき学者であることが望まれるが、よき学者であればよき教師であるというわけではない。よき教師たるためには自らがこなし知識を学生たちに伝授することへの情熱と手法を持たねばならない。

もう一つの側面がある。教師と学生がともに人間である以上、教師が学生を大事にしているか否か、教え子に対して愛情を持ち、敬意を抱いているか否か、知識の伝播以上の全人間的な関係が重要な意味を持つ。知識の提供という職務を基調としながら、師弟間に心の絆が形成される場合には、それを大きく上回る意味を帯び、逆に師弟間に不信と嫌悪があれば、知識の提供すらおぼつかないということになる。最高の教師とは、学生との間に高い志において心の絆を結ぶ教師である。

私自身の師について想起してみたい。

私は学生時代に猪木正道著『共産主義の系譜』（角川文庫）を書店で購入して読み、目を開かれるような感動を覚えた。1960年代の京都大学ではなお左翼運動が盛んであり、学生運動の指導者がマルクスの知的権威を背に教室やキャンパス内でアジ演説をする光景は日常的であった。切羽つまった口調で「体制」の悪を糾弾し危機感を煽るアジ演説に、私は違和感を覚えながらも、はっきりした観点を築けずにいた。そんな中、猪木先生の同著はマルクス主義が隆盛するに至る歴史的理を内在的にたどりつつ、理論的にも実際運動としてもマルクス主義がすでに破綻をきたしていることをも内在的に論証していた。目からうろこの思いで、3年から4年にかけてのゼミはまっしぐらに猪木ゼミを志望し、幸運にも入ることができた。

猪木ゼミでは、朝日新聞社から出た『太平洋戦争への道』全7巻を読んだが、4年生の夏休みに入る前、先生は「今日は最後のゼミなので将来の進路について一人ずつ順に言いなさい」と命ぜられた。友が皆偉く見えた。一流の大企業に内定もしくは内定まじかとの報告が次々になされた。二つの有力企業から内定を受けて悩んでいるといったうらやましい話もあった。マスコミを志望しているが、というゼミ生に対して先生は「ではY新聞に紹介状を書きましょう」と即座におっしゃったりした。私はとて、まったく就職活動をしていなかった。暢気者ゆえでもあったが、大学院に進みたいという希望もあった。ただ「大学院」を宣言するには私の成績は不十分であった。一部の好きな授業以外は出席せず、勝手に友人と研究会をやっているような私で、単位は不揃いであった。順番が近づくとともに、心臓の動悸が高まるのを覚えた。先生に一喝されたらどうしよう。審判の時が来た。「できたら大学院へ行きたいと思っています」と私は誰も言わなかった台詞を口にした。即座に先生の声が返ってきた。「勉強したいと言う者は、仕方がない。そうしなさい」突き放すような言い方であった。だが私の意

向表明を聞いた時、先生が一瞬、嬉しそうな表情をされたのを私は確かに見た。先生は満足の表情を見取られるのを厭うように、すぐに乾いた表情と口調に戻って「仕方がない」と了承されたのである。猪木先生は出来の悪い私を忌避しておられない。もしかしたら私のことを評価し歓迎しておられるのかもしれない。研究者の道に希望が点灯した瞬間であった。その年の秋の大学院入試試験では、成績優良者に与えられる内部推薦枠から外れ、外部からの人と共に受験して合格した。

修士2年を迎えた頃だったか、猪木先生から修士論文のテーマ案を考えてくるようにとの指示を受けた。私は2案を用意して出頭した。一つは、ヘーゲルから初期マルクスへ、であった。『共産主義の系譜』に感動した後、私は友人たちと世界の大思想を読む会をつくり、ヘーゲルの『精神現象学』やマルクス『資本論』を輪読していたりした。二つは、石原莞爾の思想と行動であった。大正デモクラシーから昭和の戦争の時代への転換を、石原を通じて検討しようというテーマであった。戦争の時代を研究した後、戦後日本を歴史的に考えたいと思った。猪木先生は直ちに二つ目のテーマを支持された。ヘーゲルからマルクスは、世界的に山のように研究があり、今さら新しいことは生まれまいだろうとのことであった。「石原莞爾はいいテーマです。石原の郷里（山形県庄内）を訪れて、家族や関係者の話を聞かなきゃいけませんな」とコメントされた。

夏休み前に先生に呼び出され、石原研究の進捗状況を聞かれた。一応、先行研究の状況と私の視点を答えたところ、先生は山形への旅行計画は立てたかと問われた。石原莞爾の夫人が高齢ながら存令であり、弟の六塚氏が石原の日記などの個人文書を管理している様子なので、夏休みに出来たら訪ねたいと思っている旨答えた。先生は、出来たらという私の姿勢に不快を覚えたようで、現地調査をしなければいい修士論文は出来ないと指摘された。そのうえ、先生は財布から1万円を取り出し、これで切符を買いなさいと命ぜられた。私は驚いて辞退したが、先生は自分のポケットマネーではなく、科研から出せる公費だから遠慮しなくて良いと、半ば強制的に私に受け取らせた。

私の父も学者であったが、8人の子沢山で、戦後の家庭は赤貧洗うが如しだった。が、どんなに貧乏でも真理を求める学者は立派な仕事だと私は思っていた。もし学者になればジャーナリストになりたかった。人々に事実を告げ、社会の認識をリードする仕事は大事だと感じていた。

学者は図書にふけり、ジャーナリストは現場を見て歩く。ところが猪木先生は私が学者として出発するに際し、現場を見て人と会うことをも求められた。庄内病院の病床に横たわる石原莞爾の未亡人と会い、弟さんの熱弁のシャワーを浴び、石原の弟子たちの思い出や礼讃を聞き、士官学校同期生・南部襄吉氏が預かっていた石原の士官学校時代の日記数冊を頂戴したりした忘れがたい東北旅行であった。現場の取材方式をも重視する歴史家の生き方に目覚めた私であった。諸先行研究に劣らず原資料と関係者のオーラルヒストリーを重視する。多くの学者・論者の議論を参考にしつつも、自らオリジナルな根拠に立ち返って自分の目で見て考え、独自の判断を求める。そうした学者の生き方は、修士論文を書く前に調査旅行を MUST とされた先生の指導から、私に定着したものである。しかもあの1万円である。先生は科研からおっしゃった

が、実はポケットマネーを渡し、科研から回収する労をとらなかった先生ではないかと、私はいまだに疑っている。

猪木先生はよどみなく教え子に就職の世話をしたり、推薦状を書いたり、機会を与えたりされたが、そのことを恩を着せることを嫌い、「教師の勤めですから」と突き放すように言われた。先生はベタベタした情緒関係を拒否する近代人であった。世話をするのは教師としての職責の一部としてやっているのであって、格別の恩義を感じていただく筋合いのことではないという姿勢であった。教え子たちが自前の力で自律的に成長していくことを望まれた。一方的に恩恵を与えつつ、その代償を求めないという不合理に直面して、教え子は先生の高潔さはもとより、先生が存在しないかのように扱われる信頼や情愛の如きものの巨大さを感じずにはおれないのである。

## 2. 平成21年度教育奨励賞

高等教育開発官 安岡 宏

本科教育における教育内容や教育法の向上への取り組みが高く評価された、以下の2名の教官に対し、財団法人防衛大学校学術・教育振興会から教育奨励賞が授与されました。

防衛学教育学群 戦略教育室 井上 偉彦 准教授  
電気情報学群 通信工学科 田中 哲 准教授

井上准教授は黒板、地球儀そしてパワーポイントを組み合わせ、効果的に授業を行っているところ、そして学生との対話を重視し上手に学生に参加させている点が高く評価されました。田中准教授は式を丁寧に説明し、模擬実験を取り入れることにより、難しい内容を理解させることに力を注ぎ、その結果学生が熱心に聞き入っているところが高く評価されました。

受賞されたお二人の教育などへの取り組みをここに紹介します。そして防衛大学校教育において、お二人がますます活躍されることを期待します。

## — 受賞者から —

### 再確認！ フィードバックの重要性

戦略教育室 准教授 井上 偉彦

今年の年頭にあたって、考えるより、実行を第一にやっ払いこうと決心しました。実際に実行に移ったものがすでに二つあります。一つは住んでいる神奈川区で「楽楽会（らくがくかい）」という囲碁サークル会を立ち上げたことです。年配の方が多く、一番若手？である私にまとめの依頼があり、楽しく地域交流ができるようネーミングし、隔週土曜の午後に活動しています。もう一つは学生の相談に何か役立つものはないかと、3年ほど前から、横浜駅にあるカルチャーセンターで、隔週土曜日にカウンセリング講座やコーチング講座を受けていました。自分の思っていたものとの違和を感じていたところ、コーチング講座に来ていた人から、「話すこと、聴くこと」に興味があるなら、その人が入っている「トーストマスター」というクラブがあることを紹介されました。これも隔週土曜日で見学歓迎というので、早速行って見ました。その場でタイトルを与えられてスピーチをする即興テーブルスピーチ（1人3分間、5名）、5分から7分の事前に準備したスピーチ（5名）、そしてそれらのスピーチの論評（1人3分間、5名）を実施し、ほぼ予定通りの2時間で終了しました。その間、聴き手は、それぞれのスピーチに対するコメントを1分間で書き、その日、一番良かったテーブルスピーチ、準備スピーチ、論評をそれぞれ投票するので、神経を集中させ、しっかり聴き、緊張する時間でした。3回見学し、いずれも充実した2時間でした。このクラブが、「話し方、聴き方、考える能力」の向上を目的とし、前向きに活動しているのがわかったので、3月に入会することに決心しました。成果はこれからですが、30歳代を中心に、自分たちの話し方向上のために自主的、積極的に活動しているのを見て驚きと一種の感動みたいなものを感じました。

この2件に共通することがあります。囲碁については、サークルの皆さんから「先生」と言われる方がいます。その人と囲碁を打ち終わると、「ここの所が悪かったね。攻めるのなら、ここへ、守るのなら、ここへ打つのが適切で、あなたの打ったこの手は、そのどちらでもない曖昧な所。」と打っていった石を並べ直しながら、囲碁を振り返るのです。今までは、何目（なんもく）勝った、負けたの勝敗で、実力の差がありすぎると置き碁といって、ハンディとしてあらかじめ碁盤に石を置いて対局するのです。今までは、それだけで終わっていたのですが、この楽楽会で、いざ、自分の碁を見直してもらおうと、碁盤全体の状況から、どういう考えで、打てばいいか考えるようになりました。見直すということの重要性を再認識した次第です。

一方、トーストマスターでも、スピーチ後にそのスピーチに対する論評を重視しています。どういう点が良かったのか、悪かったのか、どう工夫すれば良いのか、次のより良いスピーチに繋がるアドバイスを主観的にコメントすることが論評者の任務で

す。さらに、その論評も総合司会者から内容を評価されるのですから、驚きました。

これら二つのことの共通点は、能力を向上させるためには、やった事を見直し、評価し、それを次に生かすということです。これは、自動制御システムでよく使われる言葉、「フィードバック」です。フィードバックとは、ある系の出力（結果）を入力（原因）側に戻す操作のことであり、最良の出力を生じさせる最適制御の一手法です。最適制御ということは、形こそ違え、その考え方は自分たちの日常生活の中に多々あるものだと感じました。

フィードバックの重要性を再認識し始めた頃は、防大では丁度、2月下旬、3月上旬の定期試験、成績評価、出張とあわただしくしていた頃でした。ポストに封筒が入っており、それは教育奨励賞の受賞の連絡でした。公開授業をしたのが、前年の9月中旬ですから、すっかり忘れていて、寝耳に水という感じで、驚きとそれなりに評価されたという嬉しさがありました。連絡の内容は山崎賞、山崎奨励賞、教育奨励賞、研究奨励賞の授賞式と祝賀会の案内であり、考えていた以上の大きな賞であることを知りました。教育奨励賞は授業を公開し、選定委員により評価され、これらの賞を送る防衛大学校学術・教育振興会に推薦され決定されるのです。これは、授賞式、祝賀会や副賞を通して更に琢磨し、よい研究や教育方法を目指す動機付けにする一種のフィードバックです。だから、最適制御の考え方からすれば、フィードバックのやり方を工夫すれば、さらに効果的な研究の動機付けや教育方法があるように思えました。

問題点と改善案を3点ほど挙げます。第一にこの山崎賞、教育奨励賞などの認知度が教官の中で低いことです。特に防衛学の教官は2、3年で移動する者が多く、この賞を知らない教官もいます。新着任教官の導入教育時に紹介するとともに、学内的にも掲示物などでアピールしてもよいのではないのでしょうか。第二に授業公開の機会が少ない気がします。「学生から受ける評価の一つである学生アンケートでは客観性が無いので、賞などとは関係なく、自分の教育がどの程度のものなのか評価してほしい。」と言う先生もいます。公開授業の機会をさらに設ける方策もあるのではないのでしょうか。第三に公開授業した教官へのフィードバックがないことです。公開し評価されるというのなら、どう評価されたのか知りたいのが人情です。そして、そのアドバイスから、さらに良い教育にチャレンジするのが若い教官に求められる資質です。公開授業した教官に良かった点、工夫すべき点を知らせるフォローアップがあってもよいのではないのでしょうか。

最近、数ヶ月の間にフィードバックを思い起こす事象が続き、また、その重要性に気付かされたこのごろですが、上記のようにフィードバックは物事を効果的に働かせるため、いろいろな場面で、その原理が使われています。いただいた賞は励みになり、さらに良い教育を模索するこのごろですが、個人的に小さな努力でできる「反省」というのも一種のフィードバックです。「人生、日々の積み重ね」であるからこそ、一日に一度その日を振り返り、よりよき明日へのフィードバックに心がけましょう。

## 授業を省みて思うこと

通信工学科 准教授 田中 哲

このたび教育奨励賞を賜り、防衛大学校学術・教育振興会の関係各位および選考推薦に携われた先生方に厚く御礼申し上げます。研究と違って授業については、これまで誰からも批評を受けることなく、ひとりで試行錯誤を繰り返してきたが、客観的な評価を頂いたことは励みとなった。一方、自身の授業を省みて、はたして受賞に値するものかどうかを考えると、身の引き締まる思いでもある。今回、受賞に際してFDニュースに寄稿する機会を頂戴したので、本稿では、選考対象になった授業について簡単に紹介するとともに、授業を通して感じていることについて、いくつか述べさせて顶きたい。

今回、選考時の授業公開に当たって、光波工学 I の授業を選ばせて頂いた。この授業は、肉眼で見える可視光領域の現象を取り扱うため、視覚的な資料の提示や簡単な実験など、筆者自身が担当している授業の中でも、学生の興味を引きやすい内容が比較的多く含まれている。この授業なら、専門外の先生方も退屈せず公開授業にふさわしいと考えたわけだ。しかしながら、あいにく日程の都合により公開当日は、授業時間中にひたすら数式を板書していく項目について公開することになった。

光の回折を知っている方であれば、容易に予想がつくと思うが、この項目では、ある 1 点の光源から発してそこから離れた観測面に至る光は、球面波として表されるということから出発する。そして、光源を多点に増やすと、観測面上の光が各点からの球面波の重ね合わせで得られることを示し、光源として連続的に分布しているものを想定した場合へと発展させて、回折積分の式を得る。さらに、観測面や対象物の実際的な寸法に則して近似を適用し、フレネル回折の式、フラウンホーファー回折の式を導く。また、例として 2 次光源面におかれた開口による回折像を計算によって求めるという流れである。実際の授業では、最後に赤色レーザを使って回折像を見せるのであるが、この部分の授業では、ほとんど数式を板書していくことになる。

光波工学 I の授業を担当させて頂いた当初、回折の項目では、はじめに光の伝播に関する座標系や用語を定義した後、準備したノートに従って数式を整然と展開していく内容であった。しかし、どうも学生が授業についてこない。あるとき、学生が板書した式をノートに写していくことに精一杯、あるいは、板書を写すことをあっさりあきらめて寝てしまう、といった状況になっていることに気付いた。そこで、思い切って授業中に実験をやってみることにした。しかしながら、いざやってみると、興味がわく学生も多く実験はよく見ているようだったが、肝心な式を用いて説明する場面になると、以前とほとんど状況は変わらない。時間をかける割にはそれほど効果がないことが分かった。

現在は、実験については簡単なものを最後に見せる程度にとどめ、数式についてはむしろ時間をかけて、なるべく丁寧に板書するようにしている。単純な式変形もさらに簡単なところまでさかのぼって逐一解説する、また、関数の概形も黒板に書いて詳しく説明するなどしている。板書の量は結果的に増えたが、理解できないことを転写するよりも、ある程度分かったことを書き留める方が、ましだろうと思われる。この導入部分が分からないと、次の項目から全く理解できなくなってしまうからだ。実験の実演も魅力的だが時間の制約もあるので、しばらくこの方式で続けていくつもりでいる。

他の科目においても、数式を多用する項目は教えていていつも難しく感じている。とくに、最近は簡単な事項においても、かなりさかのぼって説明しなくてはいけない場面が多くなってきた。専門的なことを学ぶにあたって、その土台となる基礎知識が欠落しているのである。板書の途中で「分からないひと？」と聞くと、ぱらぱらと手が挙がる。寝ている学生を含めると、分からない学生はもつといるだろう。そこで、さらにさかのぼって説明するのだが、さかのぼるにも限界があるので、ある程度まで行くと、「こんなところは自分で勉強しておくように！」ということになってしまう。

とくに、1学年を担当してみると、かなり酷い状況になっていることが分かる。高校でやっておくべき基礎が無く、ベクトルや複素数が分かっていない、定義は言えてもそれらを使って何かしらの問題を解くとなると、基本的な公式を使いこなせない学生がかなりいる。これらの学生が4年間で学士たる科学的知識と思考力を身に着けるには、相当ハードルが高くなるはずだ。現在、こういった学力低下に対しては、さまざまな対策が講じられつつあり、元凶となるゆとり教育も方向転換されて底を打ったとも言われているが、最近の低下ぶりは激しく、楽観はできない。今後も授業の改善に向けて試行錯誤を続けるつもりでいるが、なかなか大変そうである。

ここでは、授業を通して最近感じていることの一部を述べさせて頂いた。授業の改善については、教官ひとりで工夫していくには限界はあるが、同じような立場の他教官の意見や取り組みの例は大いに参考になるだろう。これらの情報の共有は意義深く、多くの教官にとって役に立つはずだ。また、こういったことから、近年、各大学における組織的なFD活動が重要視されているにちがいない。本校においても、防衛大学の教育理念に基づいてFD委員会が設置され、現状の調査や教官の意見、また他大学の取り組み状況など、各種の情報が発信されている。今回、本稿を寄稿するにあたって、過去のFDニュースや関連資料を改めて拝見したが、役立つ情報が多く盛り込まれており、今後とも、参考にさせて頂きたいと思っている。最後に、日頃より教育の向上にご尽力頂き、また、今回このような機会を与えて下さったFD委員会の皆様に謝意を表したい。

### 3. FDの動向と今後の方向性

#### 大学教育研究フォーラムに参加して

人間文化学科 准教授 井上 泰至

大学は今、環境の変化にどのように対応し、教育の実をあげようと取り組んでいるのか。3月18、19日、京都大学で行われた「大学教育研究フォーラム」は、今年で16回目を迎えるそうだが、これに参加して、感じたことを一言で言えば、大学の「学校」化である。

このフォーラムは、FDから授業実践の報告、授業のサポート体制、さらにはオープンキャンパスまで、様々なテーマを扱う分科会での発表とともに、近年急速に増えつつある英語での授業の問題点や、教養教育の重点化、競争あるいは提携関係が進行する海外での大学教育の新動向など、大きなテーマからの小講演や、シンポジウムまで内容は盛りだくさんである。わずか2日間ではあるが、大学教育の課題と将来像について、かなりの知識を得ることができた。

その中から、FDに関係する点に絞って、印象に残ったことを報告しておきたい。文部科学省の高等教育企画課長からの動向と展望で示された内容である。もはや、FDそのものは大学があまねく取り組む課題として実施はされている。しかし、その方法と支援体制には依然問題が残る、という。目的は大学教育の質の保証なのだから、この二つに中身が伴わなければ、目的の達成はおぼつかない。

そこで、次にFDの「可視化」に焦点があてられる。中身は、①ティーチング・ポートフォリオ、すなわち、教員の教育改善の努力を記録し整理してゆくこと、②FDプログラムの可視化、すなわち既に実施しているFDプログラムの他大学との比較分析や、新たなプログラムの開発、あるいは新任教員に求められる「教育力」の可視化などが挙げられる。

FDは、制度として導入される段階から、教育のノウハウを記録し、統括・設計し、教員の間で伝達・共有していく段階へと来ているのである。

さらに、その先には何が待っているか。授業は教員の個人商店であるとの意識に傾きすぎることなく、各科目は、大学・学部・学科の教育理念・目的を達成するものとして位置付けられ、最終的に卒業の時点で、最低限どのような能力が身についたのか、これを可視化することが求められてゆくだろう、という。

これは一義的には、文部科学省管轄の大学に求められるものだが、1周遅れで、外部から大学教育としての適格性に審査をわが校にも迫る課題となるだろう。

こうした大きな流れの他にも、発表要旨集には大学教育に関する有益な情報が満載されている。ご関心の向きは、お声をかけて頂きたい。

## 4. 米海軍士官学校留学を終えて

### アメリカでの授業

本科学生 4 学年 夏谷 智之

2009年8月から12月の間、私は米海軍士官学校(United States Naval Academy; 以下USNA)で1 Semester勉強する機会を得ました。日本における大学教育とは異なる部分が多かったので、学生の立場から、その特徴を述べたいと思います。

#### ○ 細切れ授業

まず、制度的な違いについてです。

授業は全て 45 分。その分、同じ科目の授業が週に 2, 3 回ありました。これにより、日本での授業に比べて各授業に対する集中力が持続させやすいというえ、次の授業までのスパンが短いので、理解の定着にも役立っていると思いました。表 1 は現地での日課時限、表 2 は私が実際に受講した授業の時間割です。(表 2 中にある EI とは Extra Instruction の略で、授業のない時間に学生が個人的に教官をたずね、授業内容の理解を深めるというものです。)

表 1 日課時限

時限	時間
1	0755~0845
2	0855~0945
3	0955~1045
4	1055~1145
昼休み	1200~1320
5	1330~1420
6	1430~1520
7	1530~1620

表 2 実際に受講した授業の時間割

時限	月	火	水	木	金
1		体育	(日本語)		海上戦闘
2		法学		法学	海上戦闘
3	現代物理		現代物理		現代物理
4	統率	統率		統率	(統率EI)
5	(法学EI)				
6	20世紀の物理		20世紀の物理		20世紀の物理

単位数 法 学 2 単位  
 現代物理 3 単位  
 20世紀の物理 3 単位  
 統 率 3 単位

「細切れのほうが集中力が持続する」という事実は一考する価値があり、防衛大学校においても改善すべき余地があると思えます。改善策として、たとえば 1 番簡単なのは、授業の中で休憩時間を設けてもらうことです。90分授業の中で、まず40分はしっかり聞かせる。「普段の生活が忙しい」が売りの防大生でも、授業が始まってすぐの居

眠りは正当化できません。最初の 40 分は何が何でもしっかり聞かせる。そして最も大事なものは、その後 10 分間の休憩を入れていただきたい。この際注意しなければならないのは、効果の薄い休憩時間にしないということです。「休憩時間」というよりは、「睡眠時間」として学生に与えたほうが良いと思います。そしてすっきりした頭で、残り 40 分の授業に臨ませる。それにより 90 分という長い時間でも効率よく集中力を持続させることができるのではないのでしょうか。

### ○大量の課題

USNAにおいては、毎回の授業で必ず大量の課題が出されました。主にレポート課題と教科書の予習でした。レポートでは質・量ともに自分ひとりで解くことができなような課題が出され、予習課題についても到底まともには消化できないものでした。しかし、レポート課題の期限に関しては（防衛学系科目を除き）寛容であったため、時間をかけて理解しながら課題に取り組むことができました。しかし提出しなければ大きく減点されるため、学生は積極的に教官にアポをとって聞きに行くのが一般的でした。予習課題についても「概要さえつかめればそれでいい」という程度のもので、学生側も律儀に「予習しろといわれたからやる」のではなく、「授業中の議論についていくために予習する」という感覚でした。

### ○シラバスの徹底

USNAでは、特に防衛学系の授業でシラバスと実際の授業展開が明確に一致しており、学生としても予習がしやすかったです。専門科目に関しては学生の理解がつかず、シラバスよりも遅れた授業展開となっていました。このあたりの事情については防大とあまり変わらないように感じました。

### ○学生の理解を確認、わからなければ EI を設定

USNAでの授業は「学生の理解が前提」という意識が強かったです。常に学生との対話が重視され、学生としては息苦しい授業でしたが、その分、毎回の授業で着実に知識を増やしていったと思います。またそれでもついていけない場合にはEI、すなわち学生が空き時間に教官のところへ聞きに行くという姿勢が防大よりも学生に浸透していました。特徴的だったのは、EIの設定を教官側から積極的に提示し、学生もそれに対して嫌がることもせず、素直に従っていました。ただしこれに関しては防大よりもUSNAでは自由な時間が多かったということも大きな要因ではあると思います。

### ○テスト前は公式テスト対策

ほとんどの科目において、テスト前夜の自習時間にテスト対策授業が開講されていました。これは学生にとって点数に直結する授業であり、大きく役に立つものでした。もちろん、「普段授業を聞いていなくてもこれさえ聞けば単位がとれる」という類のものではありませんが、テスト対策の負担が軽減されて、学生としてはうれしかったです。

## ○最後に

USNAと防大では、そもそも大学教育制度が違ううえ、学校における勉学の位置づけ、学生の意識や教官の数なども違い、単純に比較することはできません。しかし私はUSNAでの勉学生活を通じて、USNAでは「ある程度高い水準を要求はされるが、それに対する合理的な教育と、フォローがなされている」と感じました。学生が勉強により集中できるような環境づくりを、防大の教官の方々にお願いしたいと思います。4 学年として、学生自身の問題は解決に向けて私たちががんばっていきたいと思います。

## 5. 防衛大学校における FD 活動

高等教育開発官 安岡 宏

### 1. はじめに

FD は Faculty Development の略で、組織的な授業改善を継続的に行うことをいう。意外にも防衛大学校の FD 活動は比較的早期に検討が開始され、積極的に押し進められている。ここでは防衛大学校における FD の歴史と現在取り組んでいる活動を紹介する。

### 2. 防衛大学校における FD 活動の歴史

平成3年度に大学設置基準が大幅に改正され、基準を緩和する一方で大学は自ら点検・評価を行って教育研究の改善に務めなければならないという努力義務が定められた。防衛大学校ではこの改正を受け、平成4年度に教育向上推進委員会が設置された。この委員会において自己点検・評価に関する様々な検討がなされた。その課題の一つが FD 活動であり、この検討が防衛大学校の FD 活動の始まりであった。

教育向上推進委員会は FD に関して (1) 授業シラバスの導入 (2) 学生による授業アンケートの実施 (3) 情報教育基盤の整備、の3点について検討され平成6年7月に答申された。(1)と(2)は教育向上推進委員会の検討が行われている最中の平成4年度から、当時の教務委員会によって実施準備あるいは試行が開始された。(3)については校内ネットワークの構築とともに eラーニング導入の検討へとつながっていった。

授業シラバスは平成6年度から配布されるようになった。授業アンケートは当初は学生にアンケート用紙を配布し、記入させ回収していた。のちに希望すればマークシートによる読み取りが行えるようになった。平成12年度には教育委員会の中に FD 検討ワーキンググループ (WG) が設置され、授業アンケートの質問内容が見直されると同時に、校内ネットワークを活用したオンライン入力による授業アンケート集計システムが開発された。平成14年度には (財) 防衛大学校学術・教育振興会が表彰する教育奨励賞が創設された。推薦者の選考は FD 検討 WG が行った。また、学生組織「学

習啓発委員会」(平成12年度～14年度)が設置され、FD 検討 WG へ学生の意見が反映された。FD ニュースは平成15年度に創刊されている。平成17年度にはFD 検討 WG は教育委員会から独立し、FD 委員会となった。

### 3. 現在のFD活動

FD 委員会では主に、教育奨励賞、授業アンケート、FD 広報ならびにeラーニングなどについて、ワーキンググループ(WG)を設置して実施および検討を行っている。昨年度の検討結果や現在実施しているFD活動をここに紹介する。

#### (1) 教育奨励賞

本科学生に対する教育内容や方法の改善向上の取り組みが顕著である者に対し、今後の更なる活躍を期待して(財)防衛大学校学術・教育振興会から贈呈される賞である。

現在は総合教育学群(数学教育室を除く)、人文社会科学群、防衛学教育学群のグループから1、2名が、数学教育室、応用科学群、電気情報学群、システム工学群のグループから1、2名が表彰される。各学群から推薦された教官は科目を指定し授業を公開する。FD 委員会委員は公開された授業を参観し、評価シートに従い評価する。教育奨励賞 WG は評価結果に基づき各グループごとに1、2名の受賞候補者を決定する。FD 委員会は教育奨励賞 WG 長から報告された受賞候補者を審議し、候補者を最終決定する。

教育奨励賞受賞者はFD ニュースを通じて教育への取り組みを紹介し、教官全員へ発信する。今年度からは公開される授業をビデオ撮影し、受賞者の授業を校内専用ホームページで公開していく予定である。

#### (2) 授業アンケート

昔は大学の授業は聖域であり、学生から授業を評価されることには大きな抵抗があった。防衛大学校においても授業アンケート開始当初から授業アンケート結果の精度や使用目的に疑問が持たれていた。しかし、大学が大衆化した現在、授業の善し悪しが教育効果に大きく影響し、授業改善を進めざるを得ない状況にある。一人でも多くの学生に少しでも多くの内容を理解させるためには、教官は学生による授業アンケート結果を謙虚に受け止め、授業方法を改善していかなければならない。

学生は授業方法や自己努力度についての6項目の質問に対して5段階で選択し、自由な意見や要望を書くことができる。それぞれの学期の終わりに学生は2週間のあいだに学内ネットワークを通じて回答を入力する。その後1週間、教官は担当した科目のアンケート集計結果と自由意見を確認することができる。さらにその後2週間、全学生および全教職員に全ての科目のアンケート集計結果が公開される。その後1ヶ月間、再び教官が担当した科目に限り、アンケート結果と自由意見を閲覧することができる。アンケート結果を公開する目的の一つに、他の科目や同じ科目の他の教官と比べて自分の授業方法がどのような位置づけにあるかを確認することにある。

授業アンケート WG による検討の結果、平成22年度後期から学期の後半に授業

の改善ができるように、学期の中間時期にも授業アンケートを実施する予定である。

### (3) FD 広報

授業改善に関する教官への啓発活動も重要な FD 活動の一つである。そこで多くの教官に防衛大学校で取り組んでいる FD 活動を知ってもらうために、学内専用ホームページに FD 委員会のページが開設されている。

FD 委員会のページは長い間あまり頻繁に更新されていなかったが、平成 21 年度に FD 広報 WG によりページが一新され、現在は定期的に更新されている。ぜひ FD 委員会のページをご覧ください、防衛大学校における FD 活動を知っていただきたい。そして現在進められている授業改善の様々な工夫を多くの授業へ取り入れていただけることを期待する。また、ご意見などを FD 委員会のページの中の「FD 対話の広場」に書き込んでいただくと幸いです。

### (4) e-ラーニング

e-ラーニング WG による検討により授業を補完する有用性が確認されている。平成 21 年度末の電子計算機換装に伴いネットワーク接続応答が改善され、さらに e-ラーニングコンテンツや LMS (Learning Management System) が充実した。現在は e-ラーニングを組織的に実施したり、教官がコンテンツを開発できる環境が整っている。平成 22 年度には TOEIC 対策として e-ラーニングが実施される。

### (5) 新任教官教育

新任職員には服務、保全、厚生、給与関係の教育が実施されているが、平成 21 年 10 月からは新任教官を対象に FD 関係の教育を実施している。防衛大学校が一般大学とどう違うか、防衛大学校の教育理念や授業アンケートなどの FD 活動を紹介している。

## 4. おわりに

大学設置基準において組織的な授業改善活動が義務化された現在、防衛大学校及び教官は授業において教育効果向上のためにたゆまぬ取り組みを続けなければならない。そのためにも FD 委員会を活用していただきたい。

発行人

防衛大学校 FD委員会  
委員長

教育担当副校長 渡邊 芳久

編集者

教務部 高等教育開発官  
教育研究推進課